

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

[分布調査と墓石調査の成果]

平成17（2005）年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会





## 序

石見銀山遺跡は、16世紀のヨーロッパで作成された地図にも記載された日本を代表する鉱山遺跡であり、ここで培われた鉱山技術が日本各地の鉱山に波及し、大量の銀の産出を可能にしました。中国や朝鮮半島に出向った大量の日本銀は東アジアの経済に大きな影響を与え、ヨーロッパと東アジアとの交易にも大きく貢献しました。

その石見銀山遺跡は、平成12年に開催された国際文化財保護審議会世界遺産特別委員会において、ユネスコに提出される世界遺産推薦候補物件のひとつに選定され、平成13年4月に世界遺産の暫定リストに登載されました。

島根県教育委員会では、平成8年度から大田市・温泉津町・仁摩町とともに石見銀山遺跡の解明を目的に総合調査を開始しました。石造物調査もその一つであり、発掘調査や文献調査等とともに継続して実施し、着実に成果を上げています。

本書は平成9年度から昨年度にかけて行った石見銀山遺跡における石造物の分布調査の成果と、これに少し遅れ平成11年度から実施してきた悉皆調査の結果をこの機にまとめた、墓石調査の成果と課題の二つの内容からなります。

分布調査は、昨年度で石見銀山遺跡の銀山櫛内と大森地区の踏査が一通り終わり、戦国時代から近代までの石造物を両地区合わせて10,000点以上発見しました。また、悉皆調査はこの分布調査の結果を踏まえ、宗派、立地、時代などを考慮に入れながら、一地点の石造物を集中的に調査してきたものです。結果については随時公表してきましたが、妙正寺跡の調査から5年が経過したのを機に、ここまでの成果を一つにまとめ、あわせて今後の課題を明らかにすることにしました。

この間、調査に際しまして御協力いただきました各寺院、各資料所有者、地元の方々など、関係各位に心からお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究や将来の保存管理の資料として活用されれば幸いに存じます。

平成17年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢 卓嗣



3. 本書に掲載した1頁は国土交通省国土地理院発行地形図を一部改変して使用した。

4. IV-2とV-1の一覧表及び図版は立正大学考古学研究室（池上悟）で作図した。

5. 本書の執筆は目次及び本文に明記したとおりである。

## 本文 目 次

I 石造物調査の目的・方法・経緯 .....	2
II 石見銀山遺跡の位置と歴史 .....	(中田健一) 2
III 分布調査を中心とする石造物調査の歩み .....	5
IV 各地区的調査概要 .....	14
1 銀山構内の石造物－平成12・13年度を中心として－ (守岡正司) .....	14
2 大森地区の石造物 (1) (池上 悟) .....	17
3 大森地区の石造物 (2) (宮本徳昭) .....	20
4 柑子谷地区の石造物 (長嶺康典) .....	21
5 沖泊・温泉津地区の石造物 (宮本徳昭) .....	24
V 石見銀山遺跡の石造物 .....	26
1 石見銀山における墓石調査と成果 (池上 悟) .....	26
2 羅漢寺五百羅漢坐像群 (宮本徳昭) .....	41
3 石見銀山の石造物等にみる石工名 (鳥谷芳雄) .....	59
VI 総括と展望～石造物からみた石見銀山～ (田中義昭) .....	61

# 例　　言

1. 本書は石見銀山遺跡総合調査の一環として平成9年度以来実施してきた、石造物分布調査の成果と、これまでの悉皆調査を踏まえた墓石調査の成果と課題についてまとめた報告書である。
2. この調査は次の組織で実施した。

## 石見銀山遺跡調査整備委員会（平成17年3月現在）

田中　琢（元奈良国立文化財研究所長）  
田中　圭一（元群馬県立女子大学教授）  
田中　義昭（元島根大学教授）  
末澤　和政（同和鉱業（株）取締役）  
藤岡　大拙（島根県立女子短期大学学長）  
青柳　正規（東京大学教授）  
斎藤　英俊（筑波大学大学院教授）  
高橋美也子（サンレディ大田館長）  
牛川　喜幸（京都橘女子大学教授）  
村上　隆（奈良文化財研究所主任研究官）  
小林　准士（島根大学助教授）  
熊谷　國彦（島根県大田市長）  
小川　和邦（島根県温泉津町長）  
池龜　貴（島根県仁摩町長）  
勝部　昭（島根県文化振興財團事務局長）

## 石造物調査指導者

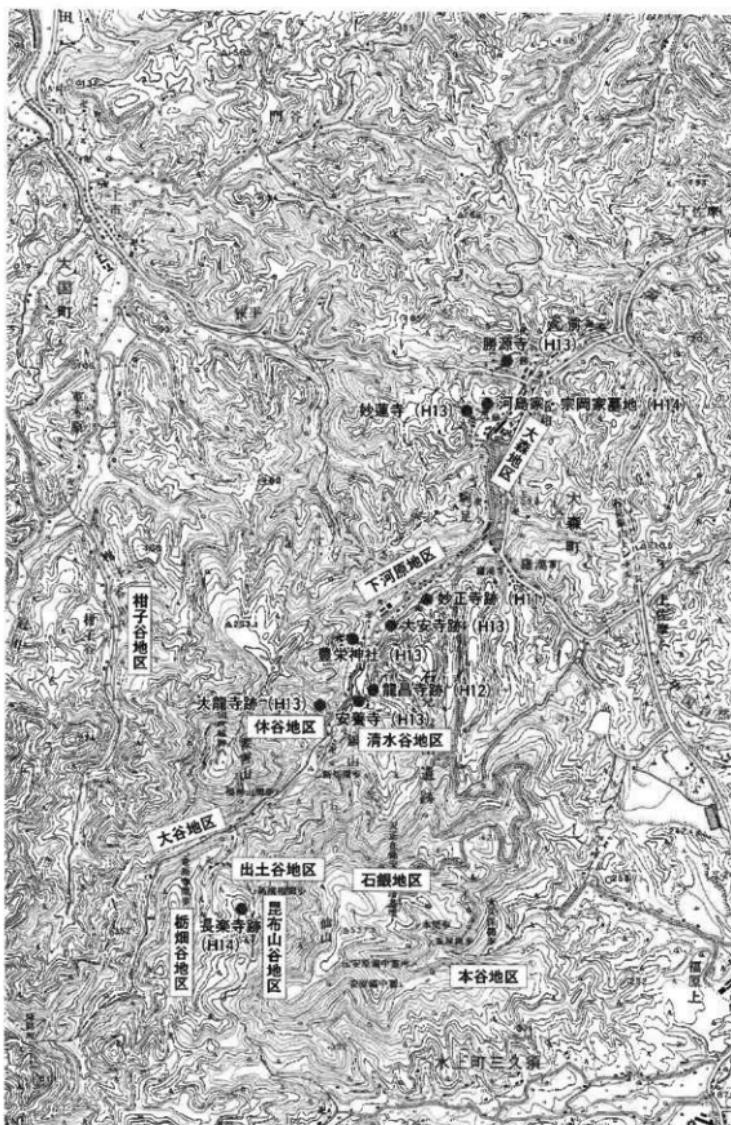
田中　義昭（島根県文化財保護審議会委員）  
池上　悟（立正大学文学部教授）  
宮本　徳昭（石造物調査員）

## 事務局（平成16年度）

野村　純一（教育庁参考）  
山根　正巳（文化財課長）　　和田　謙一（同世界遺産登録推進室長）  
吉木　律雄（同室副主任）　　吉川　広（同）　　足立　克己（同主幹）  
中田　行宏（同主幹）　　佐伯　徳哉（同上幹）  
太田　俊介（同主任参考）　　中木沙友美（同嘱託）  
祖田　浩志（同課總括GL）　　西尾　克己（同文化財G副主任）  
岡本　成生（同 G主任参考）

## 今回調査報告書作成に携わった者

田中義昭　池上　悟　　宮本徳昭  
島根県教育委員会　　島谷芳雄（世界遺産登録推進室主任）　　守岡正司（埋蔵文化財調査センター）  
大田市教育委員会　　遠藤浩巳（文化振興室係長）　　中田健一（同室主任）  
尾村健一（同調査補助員）　　松尾賢一（同）　　岩谷雅美（同）　　湯川　登  
岩谷和樹  
整理作業　　渡部恵子　　坂根ミユキ　　高村玲子　　岩崎麻子



石見銀山遺跡・石造物分布調査及び悉皆調査対象地位置図 (S=1/25,000)

# I 石造物調査の目的・方法・経緯

## 1. 石造物調査の目的

石見銀山遺跡は中世、特に戦国時代から近世、さらに近代にかけて長期にわたって形成された銀山遺跡である。これまで鉱山開発・採業の繁栄、停滞、衰退のあったことはおおよそ明らかになっているが、この歴史過程を遺構や遺物の実態に即してより詳細に明らかにし、鉱山遺跡としての特徴を把握し、鉱山史に迫ることが必要とされている。

本遺跡における石造物調査は、上記のような銀山の変遷を具体的に解明することにあり、①人口推移、②活動エリアの消長・人の動き、③社会構造の把握を具体的な目的として実施するものである。

さて、石造物には多種多量なものがあり、仮に①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切場などの生産地などの流通関連石造物とに分類する。

①の信仰関連石造物には、鉱山遺跡を構成する諸要素のなかで鉱山の盛衰がより直接的に反映されていると考えられる。墓地とそれを構成する墓石は銀山の採業に直接、間接に関わった武士、坑夫、職人、商工業者とその家族等の存在を具体的に物語る資料として重視される。よって墓地の石造物、とりわけ墓石について重点的に調査を実施することとした。

## 2. 墓石調査の方法・経緯

墓石調査は、昭和59~61年度に島根県教育委員会が行った石見銀山遺跡総合整備計画策定の

ための調査にはじまる。その後、平成9・10年度になり、石見銀山遺跡総合調査の一環として仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺門歩上・妙本寺上墓地で行った調査から本格化した。この調査では石造物のグルーピングが心がけられ、各群の規模と石造物の種類、あるいは消長のアウトラインが押さえられた。そして、紀年銘がある墓石の調査が重点的に進められ、後年の本格的な調査に備えた。また、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘がある墓石が発見され、古い墓石が存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いと判明し、発掘調査の箇所の選定にも有効であることが分かった。

こうした墓石調査の有効性が確認されたことから、調査継続と計画性が石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、以下の調査を総合的に行うこととなった。すなわち、①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るために分布調査を実施すること、②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するために詳細な悉皆調査を実施すること、③発掘調査で得られた成果と関連付けるため発掘調査地周辺の石造物について関連調査を実施することである。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査、悉皆調査、関連調査の組合せによって行われるようになった。このうち分布調査については平成15年度に至り銀山構内および大森地区の踏査を一通り終えることになった。また、悉皆調査は妙正寺跡を皮切りに、これまでに6カ所の寺院墓地を中心とする調査が実施され、その着実な成果を上げてきた。

# II 石見銀山遺跡の位置と歴史

## 1. 遺跡の位置と環境

### (1) 銀山の位置と地質学的背景

島根県は東西に長く、日本海に面して600km

に及ぶ海岸線を有している。旧国では出雲、石見と鳥嶋の隣岐の3国からなり、石見銀山は「石見国」の東側いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

出雲では、斐伊川をはじめとする河川によって、ややまとまりのある沖積平野が形成されている。これに比して石見では、江の川や周布川等の河口近くに平野は広がるが、海岸に至る山地帯によって沖積平野は広大には広がらない。海岸部に近い山塊群に象徴されることにより、「石海」や「石美」あるいは石群に石見の語源があるともいわれている。

山陽と山陰を隔てる中国山地の山並みから派生した山地帯には、石見南部特有の高原地帯がひろがり、断魚溪や千丈溪といった瀑布線によって急激な高低差を見せる。加えて三瓶山(標高1,126m)や大江高山(標高888m)などといった火山が分布し、山地帯とその間を繞う河川によって形成された小規模な可耕地や小集落が多く点在している。銀山の面影を伝える大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区も、こうした狭長な河岸段丘上に形成されている。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山(標高538m)は、大江高山から北へ4km、日本海から直線距離にして8kmの地点に位置する。大江高山は大山火山帯に属し、前期更新世に活動した火山といわれ、溶岩ドームのまとまりからなっている。仙ノ山はこの大江高山火山岩類の分布域にあり、角礫化火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を鉱脈の母岩とする。鉱脈には鉛炭鉱床型の福石鉱床、鉛鉱鉱床である永久鉱床、という二つの鉱床が賦存していることが知られている。福石鉱床の鉛鉱鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また永久鉱床の鉛鉱鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀などが含まれる。

## (2) 歴史的背景

石見銀山遺跡は、周辺の歴史においても地形的な要因から石見独特ともいえるような特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

縄文・弥生時代では、石東では発掘調査による資料が乏しかったが、近年の調査によって次第にその様相が明らかとなってきた。仁摩町古屋敷遺跡は、潮川の河岸に形成された遺跡で、

縄文時代晚期～弥生時代前期の遺物が土坑中から一括出しし、貴重な資料となった。潮川沿いには他に弥生時代の円形杭列が検出された川向遺跡が知られる。大田市鳥井南遺跡は日本海を望む丘陵上に展開した遺跡で、弥生時代から古墳時代の堅穴住居跡が多数検出されている。

9、10世紀代の遺跡では、縄軸陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面鏡の出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁をも出土していることに加えて、河口に近い河岸という立地から、海上交通の存在を予感させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙の山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では古墳時代の住居跡の他に、奈良平安期の建物跡や木簡が多数出土している。

平安末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な莊園が成立していることが知られており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの莊園、国衙領が成立する。南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見の守護となるが、応永の乱の後に石見守護職を没収される。しかし大内盛見は邇摩郡を分郡として与えられ、この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれることになった。永正(1504~1521)段階に至ると大内義興が石見一円の守護権を取り戻し、大内氏の支配下のもとに石見銀山が本格的な開発が行われたといわれている。

戦国期には大内氏と尼子氏、そして毛利氏とが銀山領有をめぐって争奪が行われ、その結果多数の城館が周辺に造されている。江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡は石見銀山領となって直轄支配され、明治維新後には大森県が置かれた後に浜田県となり、明治9(1876)年には出雲、隣岐、石見からなる島根県が設置された。

## 2. 石見銀山史抄

### (1) 発見から灰吹法の導入

石見銀山は、延慶2(1309)年に大内氏によって発見されたという伝承が残る。発掘調査では、近年、相次いで須恵器が出土している。資料整

理中ではあるが、石見銀山遺跡宮ノ前地区では、江戸初期の建物跡を遺跡の主体としているが、埋土中あるいは地山直上面に古墳時代後期ごろの須恵器が採取されている。また、仙ノ山山頂でも須恵器が発掘調査によって小片かつ少量ながら検出されている。

大内の発見伝承に対して、16世紀初頭に博多商人の神屋寿徳が行う本格的な開発との対比から、神屋の開発を、再開発や再発見と表現することが一般的である。

神屋寿徳の開発は、出雲鷲羽山の山師三島清右衛門とともに金堀（穿通子）の吉田与三右衛門、吉田藤右衛門、於紅孫右衛門らによって、大永6（1526）年に始めたと石見銀山旧記では伝える。

発掘調査の成果では、再開発を前後する時期の遺物も検出されている。柄畠谷Ⅱ区下層確認トレンチ内のSD02より出土した遺物がそれであり、時期は数点を除いて15世紀後半から16世紀中葉までの範囲内におさまるものである。他に14世紀後半から15世紀初頭の年代観が与えられる中国製の青磁瓶の破片も出土しており、これは伝世品の可能性が指摘されている。

石見銀山史において大きな画期となった灰吹法の伝来は、天文二（1533）年といわれる。「旧記」ではこのことについて、「天文二年大内復銀山を取返して一略へ此年寿亭博多より宗丹桂寿と云ものを伴い來り八月五日相談し銀と石と相雜ものを鎖と云、を吹溶し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也」とある。「おべに孫右衛門えんき 一名 銀山旧記」（以下、「おべにえんき」という）では、「白銀吹き初め候事、天文二年八月十五日 九州博多より慶寿と申押門参られ吹申候」という。慶寿については、先の「高野山淨心院往古旦家過去帳姓名録」に「出し士 廉寿 十五日」と記載があり、実在の可能性が推定されている。

灰吹法の伝来元である朝鮮ではそれ以前に、銀座統制のもと民間で日本鉛を使った灰吹法による銀鉱石の製鍊が行われており、その禁を犯した朝鮮人が処罰されたという。（『李朝実錄』）博多の商人神屋寿徳は、大内の庇護の元で半

島との交易を通じて技術の導入を試みたともいわれる。いずれにしても、灰吹法の導入により石見銀山の産銀が飛躍的に伸張していくことになった。その例として、同じく『李朝実錄』では、1538年、「倭人は銀だけを持ち他のものは持てこない」という記載をはじめ、1542年「倭国で銀を造り始めて十年にもならないのに倭銀が我が國に流布し、既に賤物となっている」とことや銀8万両の貿易を日本國工使僧安心が朝鮮に求めている記事を伝える。

中國においても、スペイン船、ポルトガル船によてもたらされる南米のボトシ銀山産の銀が流入する前に、福建のジャンクによって日本の銀が買い付けられたといわれている。

また、1552年フランスコーザビエルがロドリゲス神父に当たった書簡には「カスチリア人はこの島を銀の島と呼んでいる」と紹介しており、日本の産銀の増大が知られる記事である。

## （2）争奪戦と徳川の掌握

石見銀山の争奪戦をめぐっては、原慶三氏によって、当初から人内氏の支配下にあり、謀反による大内自害に乗じた弘治2（1556）年から水保4（1561）年まで、尼子氏が銀山を領有。その後、毛利の支配下に入る、とされている。

毛利氏は温泉津を直轄地として、銀山を「温泉銀山」「銀山温泉津」と称した。また、幕府と朝廷に料所として寄進、朝廷に対して毎年上納を続けていたという。詳細な生産高は不明であるが、「銀山納所高辻」（『毛利家文書』）によれば、毛利氏直納分として1年間で都合33,000貫あまりあったという。

本能寺の変の後、秀吉は毛利と和議を結び、その後文禄元（1592）年、慶長元（1596）年の朝鮮侵略に際して石見銀で大量の州石御公用銀を造り、その戦費としたといわれている。

関ヶ原の戦の後、石見銀山は徳川氏の管轄に置かれることとなり、荷分割と甲州流といわれる鉱山技術によって鉱山經營に長けた大久保長安による銀の増産が行われることになった。

石見銀山遺跡には、墓石を中心として数多くの石造物が残されているが、近年の石造物調査によって、從来天正年間を最古としていた墓石

の年号が、元亀3（1571）年に遡ることが知られるようになった。また、銀山全域の悉皆的な調査は未了ではあるものの、墓石の数的ピーカーは、おおよそ1600年頃と1800年頃にあると提起されている。

### （3）江戸期の石見銀山

石見銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎える。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3600貫の銀を産したという。

銀山経営を支える仕組みとして、元禄年間（1688～1704）頃より石見銀山領の村々のうち佐摩村を中心とした周辺の邇摩郡・安濃郡・邑智郡に銀山御園村32ヶ村が設定され、坑内の支柱（栗材）や精錬や坑内作業に必要な炭、繩、火などを供出することが義務付けられた。それぞれの坑道の経営方法は慶長初期頃から奉行所（代官所）直営の御直山と、山師の請負山である自分山があった。御直山の経営は公費から資金、資材が提供され、鉱石を一定の割合で公儀・主生・銀掘りに荷分けされるもので、その割合は時代により変遷があった。

江戸期を通じて奉行・代官・預りが59人あり石見銀山附御料約4万8千石の統治と銀山の管理をおこなっている。寛永期（1624～1644年）以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになり延宝年間（1673～1680）になると產銀量は年間約4百貫に減り、幕末の安政6年には30貫と記録にある。元禄4（1691）年には間歩数92の内63が休山、正徳4（1714）年には、127の内75、享保14（1729）年では、129の内74、文化13（1816）年では277の内217、天保15（1844）年285の内251が休山となっている。

## III 分布調査を中心とする石造物調査の歩み

石見銀山遺跡における石造物調査は、既述のように、昭和59～61年度に行われた考古学的調査を嚆矢としながら、石見銀山遺跡総合調査の一環として位置づけられた平成9年度の石造物調査から本格的に始まった。その後継続して行われているこの調査は、およそ分布調査、悉皆

### （4）近代の銀山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元に払い下げられ小規模な経営が続けられたが、明治5年（1872）の浜田沖地震で坑道はほとんど水没し、全山休山状態となった。明治19年合名会社藤田組が1鉱区の借区権を買取り、翌20年には全鉱区を買取り、仙ノ山南の銀山部（本谷鉱区）で採掘が開始された。この時から大森鉱山となり、鉱山事務所を銀山部におき、24年からは邇摩町柑子谷の永久部（永久鉱区）に製錬所が建設された。28年には清水谷に収銀式法による新製錬所が建設され操業を始めたが、翌29年に良鉱が得られなかったことなどにより、休止することになった。開発の中心は永久部となり、同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。

主要产品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気により隆盛をみた明治後期から大正初期には、柑子谷は一大鉱山町に発展した。大正6年（1917）の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、その上安価な外国産銅におされ、ついに大正12年（1923）6月に休山に追い込まれた。昭和16年（1941）国の援助で再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、柑子谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、坑道も水没して再開発は断念され、現在に至っている。発掘調査では、「藤田組大森鉱山」と書かれた陶器器が柳畠谷地区、出土谷Ⅱ区で出土しており、柳畠谷Ⅱ区では製錬施設とそれに伴う坑道が検出されている。

（中田健一）

調査、関連調査の3本柱を軸にして実施してきた。そのうち分布調査は平成15年度の段階で銀山柵内および大森地区の踏査がほぼ一巡して終了した。ここでは分布調査を中心にしながら、この間の調査経緯を年度ごとに振り返ってみる。

## 1. 昭和59～61年度の調査

島根県教育委員会がこの時期に取り組んだ「石見銀山遺跡総合整備計画策定事業」に伴って行われた分布調査である。石造物の種類が確認され、徳善寺跡、妙像寺跡、龍昌寺跡、大龍寺跡の4寺院墓地における石造物の特色が指摘された。担当者は巡査法障であり、成果は最終年度に刊行された計画策定報告書に掲載された。

## 2. 平成9年度の調査

石造物調査が石見銀山遺跡総合調査の一環として位置づけられた最初の年度である。発掘調査が行われていた仙ノ山の石銀地区を中心に、6月から翌年3月にかけて分布調査が実施された。現地調査は田波文雄が担当し、調査の結果、I～V群の墓地群を確認した。

## 3. 平成10年度の調査

前年度に引き続き石銀地区の分布調査が6月から7月にかけて行われた。8月以降は、発掘調査の主体が仙ノ山の麓の出上谷地区に移ることになったため、この調査も佐尾亮山神社付近、龍源寺間歩上、妙本寺上の墓地について実施した。現地調査は宮本徳昭が担当し、成果は前年度の結果ともあわせて、年度末刊行の『石見銀山遺跡総合調査報告書第3回（城跡調査・石造物調査・問歩調査編）』に収録された。

## 4. 平成11年度の調査

6月18日に調査部会が行われ、前年度までの調査の進行状況が確認された。その上で当年度は地元スタッフと立正大学の2班体制で臨み、前者が通年で龍源寺間歩上墓地の調査と竹田地区周辺の墓石調査を行うことを計画した。また、この年より悉皆調査を実施することとなり、大学の夏期休暇中を利用して2週間程度集中して実施することなどを確認した。悉皆調査は、立

正大学池上助教授（当時）を団長に同大学院生・学生9名が主体となり、9月6日～10月29日までに計4回にわたって実施した。調査対象は妙正寺跡墓地で約4,800m<sup>2</sup>を悉皆調査した。約1,000個体を確認し、すべてについてカードを作成した。また、分布図を作成して位置を記録し、基本的にすべてを実測、写真撮影し、銘文については採択も行った。9月10日には当地で中間報告会を行い、成果を検討し合った。

翌年1月20・21日に第2回の部会を開催し、妙正寺跡墓地と竹田地区周辺の調査報告、長期および次年度の調査計画の検討、次年度調査予定地の現地視察を行った。このなかで妙正寺跡墓地の調査報告書は、次年度で作成するとともに、石造物調査報告書は寺跡や墓地群などのまとまり毎に順次刊行することとした（なお、竹田地区周辺の成果は平成14年度刊行の『石見銀山遺跡発掘調査概報12』に掲載した）。

## 5. 平成12年度の調査

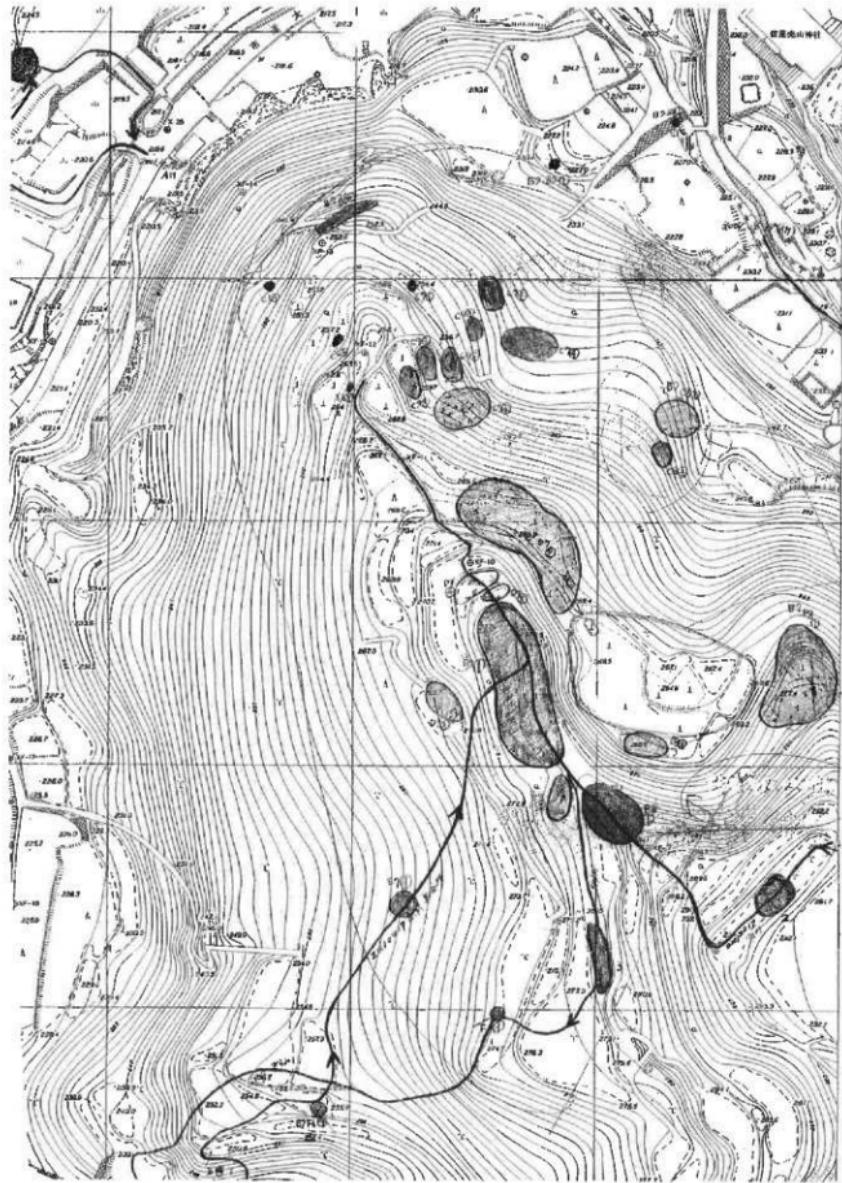
5月10日に部会が開催され、当年度の事業計画を検討したが、分布調査はこれに先だって4月下旬に休谷・清水谷・下河原地区を対象に行なった。調査参加者は遠藤、中田、松尾、守岡、鳥谷であった。成果は後述の守岡報告に詳しいので、ここでは割愛する。

悉皆調査は、代官窓所をはじめ、一石室印塔など戦国時代の墓石等がかなりの量ある曹洞宗寺院の龍昌寺跡を対象に、8月21日～9月2日の2週間実施した。1日には成果報告会が行われ、元亀3（1572）年銘を最古とする、総数535点の資料が明らかにされた。

関連事業として、大森町羅漢寺五百羅漢の修理計画に伴い、中央窟の石造物調査を県文化財課が実施した（第1次）。現地調査は鳥谷、阿部、田中の3名が当たり、『季刊文化財』第104号に成果を報告した。

## 6. 平成13年度の調査

この年度は部会を2回開催し、第1回が「第



分布調査の諸査記録（平成13年度、妙本寺上墓地付近）

12回調査整備委員会」が開催された翌日の5月10日に実施し、本年度の調査計画を打ち合わせた。また、第2回の部会は「第13回調査整備委員会」の開催日と同じ11月8日に行い、豊栄神社の調査についての報告等がなされた。

分布調査は第1回の部会に先だって4月16日から26日かけて実施し、大谷、昆布山谷、出土谷、柳畠谷の4地区を踏査した。調査の結果、32カ所で約2,700基近い石造物を確認した。古い銘文としては元極楽寺(1593)、長楽寺跡(1590)、妙本寺上墓地(1576)、徳善寺跡(1582)などがあった。調査参加者は遠藤、中田、島谷、守岡、岩谷、湯川、坂根、今岡であった。

悉皆調査は8月19日から9月1日にかけて、大龍寺跡(臨濟宗)、安養寺(浄土真宗)、大安寺跡(浄土宗)、妙運寺(日蓮宗)、勝源寺(浄土宗)、熊谷家墓地を対象に行い、計654基の石造物を確認した。前者2寺院は宗派別の調査を意識したものであり、後者3寺院は確実に年代や階層が分かれる石見銀山奉行・代官墓所の調査を目的にしたものであった。また、熊谷家墓地は大田市が実施する「重要文化財旧熊谷家住宅保存修理事業」に伴う公開活用を図るために資料を得る目的であわせて調査したものである。これらの成果は調査報告書3に報告した。

さらに豊栄神社境内にある石造物の悉皆調査を実施した。境内には寄進灯籠を中心に29基の石造物を確認し、実測図作成、銘文解説を行った。銘文に関連しては「寄付物品性名記簿本帳写」(豊栄神社文書)との照合も行ったが、この成果は当該年度刊行の「石見銀山遺跡ノート1」に報告した。また、城上神社、佐見亮山神社、高砂神社の石造物についても行った。参加者は守岡、今岡、坂根であった。

関連調査では羅漢寺五百羅漢を年度末の3月に実施し、右窟の253体について計測、銘文、写真撮影を行った(第2次)。担当者は宮本、阿部、田中の3名であった。また、石見銀山遺跡と類似した石塔がある飯石郡赤来町赤名の大光寺跡の石造物調査を行った。担当者は島谷、岩谷、湯川の3名であった。

銀山権内の北側に位置する仁摩町柑子谷地区

では、2カ年継続で町内遺跡詳細分布調査が始まった。調査は長嶺、新林が担当し、当該年度の調査報告書(遺跡分布地図)1が刊行された。

## 7. 平成14年度の調査

分布調査は5月27日から31日にかけて本谷地区について踏査した。調査の結果、淨国寺跡ほかで約110基の石造物を確認した。種別には一石・組合せ宝篋印塔、一石・組合せ五輪塔、無縫塔、角塔、石仏などがあった。この調査をもってひとまず銀山権内の分布調査を終えた。調査参加者は宮本、遠藤、中田、守岡、島谷、守岡、坂根であった。

悉皆調査は8月25日から9月1日にかけて、昆布山谷にある長樂寺跡墓地を対象に行った。宗派別の真言宗寺院を目的にしたもので、計213点の石造物を確認した。文禄3(1594)年を最古とし、19世紀半ばまでのものを確認するとともに、他宗派の墓標が混在していたことから慈尊(共同墓地)として形成された可能性が指摘された。また、この調査期間中、石見銀山支配の上で重要な役割を果たした地役人関係の墓所である、西性寺裏墓地にある宗岡・河島両家の墓所を調査した。

また、前年度悉皆調査した勝源寺に関連して、当寺境内にある東照宮の位牌調査を実施し、記録作成を行った。担当者は島谷、和田の2名であった。

関連事業には、前年度に引き続き羅漢寺五百羅漢の右窟252体の調査を実施した。調査期間は5月12日から23日にかけてあり、宮本、坂根の2名が担当した(第3次)。また、仁摩町柑子谷地区的遺跡詳細分布調査が前年度に引き続き実施され、調査報告書(遺跡分布地図)2が刊行された。担当者は長嶺、新林の両名であった。さらに、石見銀山街道(網ヶ浦道・温泉津沖波道)調査に伴う、街道沿いの石造物分布調査が2か年継続ではじまった。担当者は宮本、島谷、湯川、岩谷の4名であった。

## 8. 平成15年度の調査

7月7日に大森町発掘調査事務所で部会を開催した。当年度の事業計画等を検討し、大森地区の分布調査を実施することを決定した。

分布調査は8月25日から29日にかけて集中して実施した。一部を除き、総数約5,000基を確認し、29日には成果報告会を行った。担当者は池上教授を中心となって立正大学院生・学生5名が行い、これに地元から宮本が加わった。8月1日から3日にかけては夏期にできなかつた部分の補足調査を行った。宮本、坂根が担当した。

悉皆調査については、当初計画では元極楽寺跡を予定していたが、世界遺産登録を目指した業務量を配慮して、7月7日に開催した部会において当年度は中止することを決定した。

関連事業として、前年度からの継続調査である石見銀山街道調査（辆ヶ浦道・温泉津沖泊道）に伴い、街道筋の石造物分布調査が行われた。この年度は宮本、坂根が担当し、成果は前年度

とあわせて、16年3月刊行の街道調査報告書のなかにまとめ報告した。

## 9. 平成16年度の事業

第1回の部会が5月14日に大田市あすてらすで開催され、当年度は平成9年度から継続して実施してきた分布調査と、これまでの調査全体にわたる成果と課題についてまとめ、報告書を刊行することとした。

第2回の部会は9月9日に温泉津町コミュニティーセンターにおいて開催し、調査報告書作成の中間報告会とした。報告すべき項目、執筆内容について協議を行ったが、この部会にあわせて前日には現在も探掘されている温泉津町福光の石切場の見学会を行った。現地調査は5月の部会において当年度は行わないことを決定したが、関連事業として石見銀山街道調査（集落調査）に伴って、温泉津・沖泊地区の石造物分布調査が行われた。調査担当者は宮本であり、調査報告書が17年1月に刊行された。

表1-1 石見銀山遺跡石造物分布調査の概要（大森地区）

群	寺塔との関係	上層	下層	総基數	一室	一軒	複数	無室	角塔	石仏	その他
1	風呂山口墓地	元永3(1690)	昭和31(1956)	214	6			199			
2	佐倉山墓地	寛永3(1626)	昭和48(1973)	614	13	35					
3	正身寺墓地	元和7(1621)	昭和45(1970)	752	117	35					
4	妙満寺墓地	明和6(1769)	現在	184	6						
5	両性寺墓地	元禄9(1696)	平成	1675				1675			
6	熊谷家公廟			15							
7	浮土宗傳御寺			232		3					
8	橋本家墓地	宝暦9(1799)	昭和7(1932)	27							
9	石崎家墓地			33							
10	龍勝寺墓地			65							
11	浮士次大曾寺			954							
12	尾高寺	寛永3(1774)	平成11(1999)	122	1			41	66	無縫塔6、南型3、灯籠外5	
13	龍光寺	寛保19(1730)	平成11(1999)	143	1	1		60	36	無縫塔10、灯籠外15	
14	猪谷山墓地	元禄16(1733)	昭和19(1944)	355		1		335	19	中型墓地、無縫塔2	
15	猪谷入り口	寛永6(1629)	安政元(1854)	6					6	石合入り2	
16	猪谷男	文政7(1824)	明治35(1902)	8	1			7			
17	猪谷北側丘陵										
18				3	1	1		1			
19		寛永元(1624)	正徳元(1644)	5	5						
20	城上神社										
計				5407	149	76	2	1	2317	147	



図1-1 石見銀山遺跡（大森地区）石造物分布図（1:5,000）

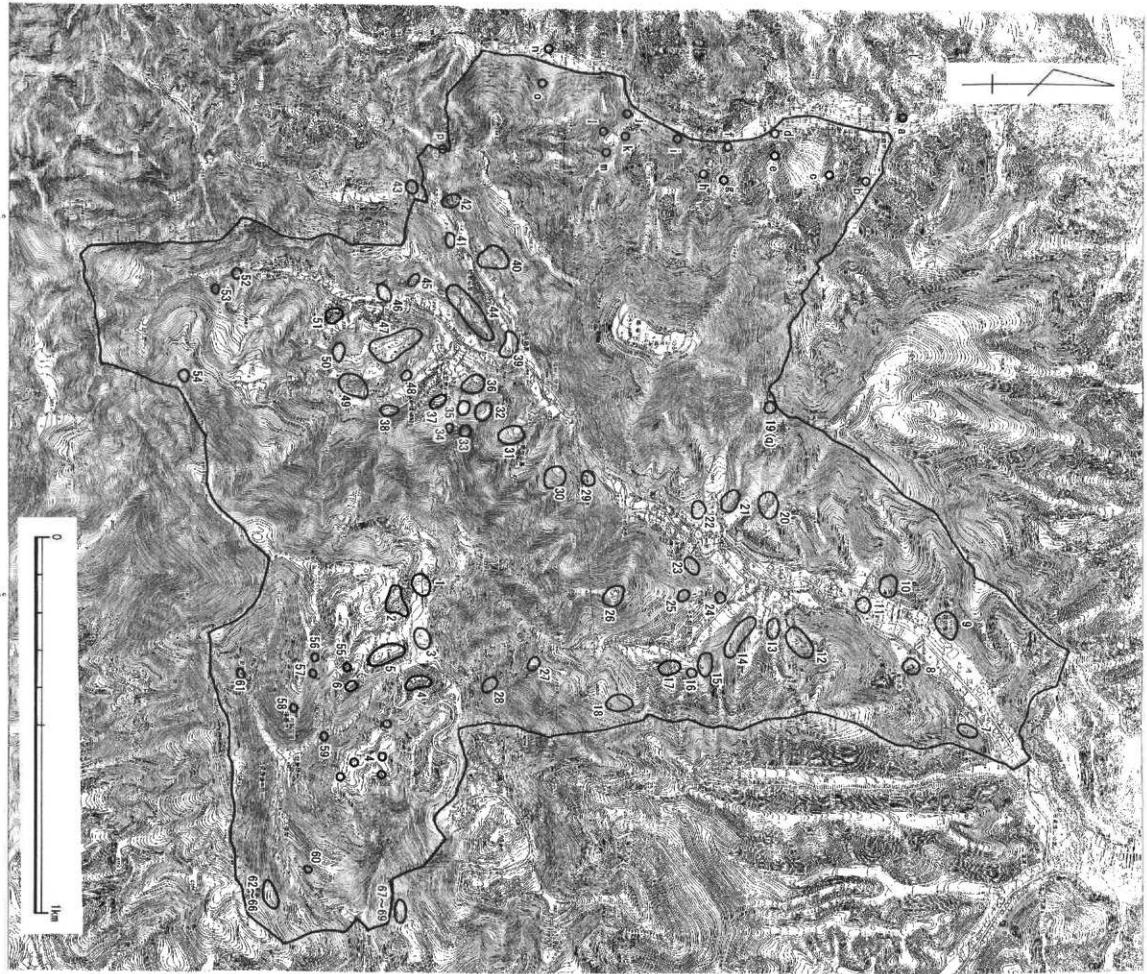


图 1-2 石见银山油井(深山内)石油物分布图 (1 : 10,000)